

卒 業 論 文

『ディスペンセーション主義
終末論の克服』

< 2009年度卒業 >

氏 名：KBI 3年生 仲井 隆典

(指導教官：安黒 務先生)

<目 次>

I はじめに	1 頁
II 終末論の争点	3 頁
(1) 携挙について	3 頁
(i) ディスペンセーション主義の主張	3 頁
(ii) ディスペンセーション主義への反論	4 頁
(ア) エリクソンの見解	4 頁
(イ) 岡山氏の見解	5 頁
(2) 再臨のあり方	6 頁
(i) ディスペンセーション主義の主張	6 頁
(ii) ディスペンセーション主義への反論	7 頁
(ア) エリクソンの見解	7 頁
(3) イスラエルと教会	9 頁
(i) ディスペンセーション主義の主張	9 頁
(ii) ディスペンセーション主義への反論	11 頁
(ア) ジョージ・ラッドの見解	11 頁
(イ) グルーデムの見解	13 頁
(ウ) ジョン・マーレーの見解	14 頁
(4) 患難について	16 頁
(i) ディスペンセーション主義の主張	16 頁
(ii) 高木説の見解	16 頁
(iii) ディスペンセーション主義及び高木説への反論	17 頁
(ア) エリクソンの見解	17 頁
(イ) 岡山氏の見解	17 頁
(ウ) 患難の中に現わされる神の愛	19 頁
(5) 千年期について	20 頁
(i) ディスペンセーション主義の主張	20 頁
(ii) ディスペンセーション主義への反論	20 頁
(ア) ジョージ・ラッドの見解	20 頁
(イ) 岡山氏の見解	21 頁
III 終末論のとらえ方	23 頁
(1) 「二つの神の民 二つの神のプログラム」	23 頁
(2) 「一つの神の民 一つの神のプログラム」	23 頁
(3) ディスペンセーション主義の聖書解釈が受け入れられてきた理由	25 頁
(4) 終末のあり方	28 頁
IV ま と め	29 頁
<参考文献>	

論文講評

仲井隆典著『ディスペンセーション主義終末論の克服』

仲井隆典著『ディスペンセーション主義終末論の克服』は、非常にすぐれた論文である。このテーマに関連し、岡山英雄著『小羊の王国』に以下の記述がある、『レフトビハインド』がいのちのことば社より邦訳出版され、話題となっているが、果してこのフィクションの根拠となっている聖書解釈、終末論は、妥当なものなのだろうか。数多くの終末論に関する書物が出版されてきた。しかしそのほとんどは、特別な神学的枠組みの中で語られてきたように思える。しかし聖書の語る終末論とは何か。みことばに深く根ざした終末論とは何か」と。

さて、“特別な神学的枠組み”とは何か、それは、古典的ディスペンセーション主義(そしてそのDNAを宿している修正版等)のことである。神学的にしっかりしている神学校をもつ教派ではすでに何十年も前に克服された課題である。しかしバイブル・スクール・レベルの聖書学校では“問題意識”を抱くことがないばかりか、この明らかに間違いとして分類されている“ディスペンセーション主義聖書解釈法”を普及させるような聖書教育をはかっていたりしている。まさしく“盲人が盲人を導く”世界である。

日本のキリスト教会における大きな問題のひとつがそこにある。私自身、約二十年間この課題の克服につとめてきた。そして、特に昨年は集中的に取り組ませていただいた。これらの取り組みを正面から受けとめ、自分の問題として咀嚼し、今回それらの学びの総決算として『ディスペンセーション主義終末論の克服』という論文をまとめられた仲井神学生に敬意を表したい。このような素晴らしい論文にまみえるのは、“教師冥利につきる”といえる。この論文は、小冊子として出版されるのがふさわしい。いやぜひ出版していただきたい論文である。というのは、『ディスペンセーション主義終末論の克服』ができずに“迷路”の中をさまよっている数多くのクリスチャンが日本には溢れており、そのような人々を誤りの中に導き入れることに熱心な、神学的に未熟な教師も多く存在するからである。すでに、第一弾として、このテーマを組織神学的視点から扱ったエリクソン著『キリスト教神学』が出版されている。第二弾として、聖書神学的視点から扱った岡山英雄論文『患難期と教会』、著書『小羊の王国』が出版されている。それに続く第三弾として位置づけられるくらいにすぐれた内容に仕上がっている。大変分かりやすいので、この論文が出版されたあかつきには、日本のキリスト教会から誤った聖書解釈である古典的ディスペンセーション主義聖書解釈の払しょくと、『ディスペンセーション主義終末論の克服』が進展するための強力な武器となると確信している。

この論文のすぐれた点のいくつかをみていこう。この論文の第一のすぐれた点は、その「問題意識の明確さ」である。テーマにおいて『ディスペンセーション主義終末論』が誤ったものであることが明確にされている。神学的素養の薄い人々は、「ディスペンセーション

ン主義聖書解釈」を、単に聖書解釈法の多様性のひとつのように考えている向きもあるが、それは“神学的にしろと”の考え方である。「ディスペンセーション主義聖書解釈」は、確かに聖書解釈法における多様性のひとつである。この「多様性」はかっこ付きであり、ひとつの意味が隠されている。それは、「この聖書解釈法は、聖書の啓示が許容している範囲の内側にはない」という意味である。「聖書の啓示が許容している範囲の外に位置付けられる、根本的に“誤った聖書解釈”として位置付けられている」多様性なのである。これは、神学の世界における常識であり、バーナード・ラム著『聖書解釈学概論』等の福音派の基準的神学書でも同様の評価である。しかし、日本のキリスト教界の歴史的鳥瞰的視点の欠如した教派においては、福音主義諸教会における「常識」が「非常識」となり、「非常識」が「常識」となっている現実が今なおあるのである。まさしく、そこはよくいわれる「石が浮き、木が沈む」世界なのである。この論文は、この現実に果敢に挑戦している価値ある論文である。

この論文の目的は、『ディスペンセーション主義終末論』の誤りを明確に描写し、それをいかに『克服』するのかの道筋を明らかにすることである。ボクシングに例えると、その対戦相手が明確なのである。であるから、この対戦において勝利するためには、対戦相手の弱点を明確にし、その部分を徹底的に攻撃することにより相手をノックアウトできるのである。仲井神学生は、この試合のラウンドを五つのラウンドに設定し、①「携挙について」、②「再臨のあり方」、③「イスラエルと教会」、④「患難について」、⑤「千年期について」の部分を攻撃しておられる。これらの主題は、ディスペンセーション主義の誤った聖書解釈の“急所”である。まず各ラウンドの最初において、「ディスペンセーション主義の主張」を中立公平・簡潔明瞭に説明されている。これはエリクソン著『キリスト教神学』で学ばれた聖書解釈の原則の忠実な実行である。相手に得意なパンチを打たせておいて、そこに潜むディスペンセーション主義 “聖書解釈の誤り” をこれまた中立公平・簡潔明瞭に指摘されていく。神学界でほとんど評価されていない三流のいかかわしい神学者の単なる思い込みやこじつけによる批判ではない。また、聖書各書の統一性という聖書観を共有していない、聖書記者の意図とは異なる“解釈者による創造的解釈”による特異な解釈にたつのもない。福音派における第一級の神学者たち(エリクソン、岡山、ラッド、グルーデム、マーレー、等)の、このテーマに関する、歴史的な吟味を受け、ゆるぎない高い評価を確実なものとしてされている資料源からの引用に基づく健全で説得力のある批判である。それがこの論文の価値を第一級のレベルのものにしている。

仲井神学生のパンチは、顔面に、ボディーに、あごに、的確にヒットしている。各ラウンドの各主題で、「ディスペンセーション主義終末論」は耐えがたいダメージを受けている。読者は、「ディスペンセーション主義聖書解釈」の誤りを、健全な「福音主義聖書解釈」との対比を見せられる。そして、この試合の最後に「終末論のとらえ方」に関する整理がなされ、論文は完結する。聖書は「神のひとつの民、ひとつの神のプログラム」を啓示しているのであって、ディスペンセーション主義聖書解釈でいわれているように「神の二つの

民、二つのプログラム」ではないのである。この論文は、このディスペンセーション主義聖書解釈の“誤った解釈学的前提”とその“誤った終末論解釈”をあますところなく打ち砕いている。勝ち負けが灰色の判定による勝ち負けではない。完全にノックアウトによる圧倒的で完全な勝利なのである。「ディスペンセーション主義聖書解釈法の誤りとその結実としての終末論」に対する「福音主義聖書解釈法とその結実として健全な終末論」の勝利である。そのことが明らかにされている。

この論文を読んで、このテーマに関する福音派の第一人者である岡山英雄氏の意見・感想を聞きたくなった。メールに添付して送ると数日後返信メールが届いた。「メールをありがとうございます。仲井さんの論文を読ませていただきました。とてもよく書けておられると思います。私の本も内容をよく理解して頂き、感謝しています。仲井さんによろしくお伝えください。よき学びを指導しておられる先生のご奉仕に、主の恵みが満ちあふれますように」とのことであった。私は仲井神学生に私と岡山先生の評価を伝え、ぜひこの論文を、このテーマに関する、キリスト教会における第三弾として出版されるよう励ました。

カルヴァンが、プロテスタント・キリスト教の金字塔といわれる『キリスト教綱要』を出版したのは、二十代であった。それには比べることはできないが、「この仲井神学生論文が、キリスト教会における『ディスペンセーション主義終末論の克服』に歴史的貢献を果たすことは間違いのないことである」と確信するのである。

2010年2月26日
論文指導教官：安黒務